

(川辺郡笠沙町赤生木字西之菌)

位置と環境

北側に下降傾斜している台地の先端近く、標高約9mの地点にあり、現在では遺跡の前は埋立てによって陸地化し、水田と化しているが、近世以前は海に面していた。

調査の経緯

県道31号線（現在は一般国道226号線）新設改良工事に伴って、昭和52年（1977）に県教育委員会が発掘調査した。

遺構と遺物

縄文時代から江戸時代まで連綿として続く複合遺跡である。

縄文時代の遺構は前期の列石と集石遺構がある。列石は幅20～40cm、長さ515cmにわたって1列から2列、弧を描いて礫が配されている。集石遺構は直径80cm、深さ20cmほどの円形をした穴に多くの礫がつまっている。

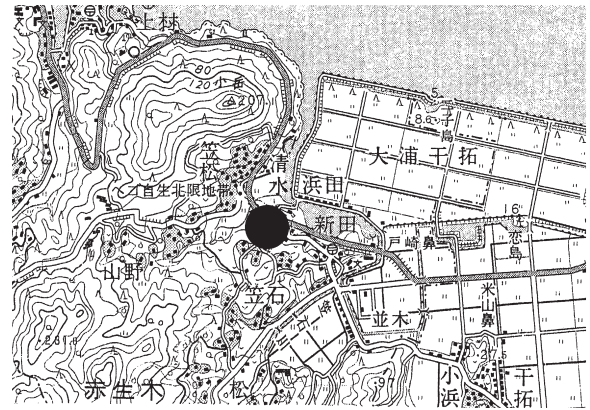
土器は早期（山形押型文・桑ノ丸式、塞ノ神B式）、前期（轟式）、中期（春日式）、後期（市来式・北久根山式・西平式）、晩期（黒川式）のものが出ており、前期と後期のものが多い。前期の轟式土器は内外とも二枚貝で整形し、口縁部付近に1～3条の突帯があるものとなないものがある。底は丸くおわるものと安定した平底のもの、上げ底のもの3種類がある。後期の土器でもっとも多いのは北久根山式土器で、沈線・貝殻刺突文などの文様がある。

石器には石鏃・石匙・石錐・削器・打製石斧・磨製石斧・剥片石器・敲石・窪み石・砥石などがある。石鏃はえぐりの入ったものが多く、39点のうち黒曜石製20点、安

山岩製11点、玄武岩製7点である。石匙は5点あり、横長が4点、縦長が1点である。削器は



写真1 集石



第1図 西之菌遺跡の位置

5点で、いずれも自然礫から剥いだ剥片の周辺を細かく調整している。打製石斧は6本あり、頭部から刃部まで同じ幅で伸びるものが多い。磨製石斧には厚いはまぐり刃のもの、石のみ状のもの、小型の扁平石斧などがある。これらの定形化した石器の他に剥片を利用した石器も多い。また、横剥ぎの石器が多いのも特徴といえる。

このほかに土偶・塊状耳飾なども出土している。弥生時代の遺物は、中期の山ノ口式土器が出土している。



第2図 縄文時代前期・中期の土器

古墳時代の遺物はこの台地全体に散布しており、集落をなしているようだが、住居跡は見つかっていない。2.1m×1m、深さ0.15cmの長楕円形の土坑があり、4世紀頃の甕形土器・壺形土器・把手などが出ている。この他に前期から中期にわたる甕形土器・壺形土器・小型丸底土器・鉢形土器・高坏形土器・蓋形土器・手づくね土器などが出土している。4世紀のものを主体とし、一部5世紀後半のものまで出ている。

古代の土師器坏、須恵器坏・小壺・甕などが出ており、須恵器坏には高台付きのものとなないものがある。

室町時代の建物・柵列も見つかっている。多くの柱穴があり、うち1棟の建物がまとまった。南北方向に長い1間(4.2m)×3間(7.2m)の掘立柱建物跡である。柵列と思われるものは柱穴がほぼ1列に並んでいる。土師器甕、瓦質鉢・すり鉢・甕、陶磁器、土錘などが多量出土している。瓦質甕には菊

花文の押型が見られ、胴部に突帯がある。

陶器では備前焼が多く、壺

とすり鉢がある。

磁器には青磁の雷文のある碗・線描き蓮華文のある碗・無文で外反する皿・綾花皿のほか、白磁・染付がある。これらは14世紀から16世紀までのものである。

江戸時代の墓が6基発見された。いずれも長方形あるいは楕円形の平面形をしており、その規模は長軸が1.3～1.6m、短軸が0.6～0.9mだったが、1基だけは0.8m×0.5mだった。深さは約1.2mですべてに骨が残っていた。骨の残りは良好で、横向きに置かれ、足と腕を曲げていた。副葬品はなかったが、角釘の出た墓があったことから木棺だったことが考えられる。享保年間の年号のある墓石があったことや、薩摩焼の破片の入った墓があったことから17世紀頃のものと思われる。

特徴

- ・縄文時代前期・後期を主体とする遺跡であるが、長期にわたって生活している。
- ・縄文時代後期においては西九州系の土器・石器が多く出ている。
- ・土偶・玦状耳飾りなどの特殊遺物が出土している。

資料の所在

出土遺物は、鹿児島県立埋蔵文化財センターに保管されている。

参考文献

鹿児島県教育委員会1978「西之蘭遺跡」『鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書』8

(池畑耕一)

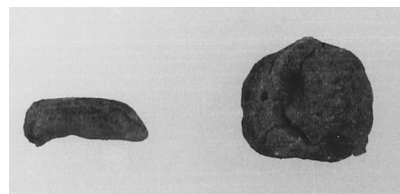


写真2 土製品



石器(1～15:石鏃、16～19:石さじ、20:石きり、21・22:削器、23～25:打製石斧、26～28:磨製石斧)

第3図 石器